

すれば人間的であるか自然的であるかに依るものである、けれども今後吾々の爲に残されたものは人間的なものと自然的なものが相互し、相俟つて發展して、イデーの肉化と自然意志の卒直な移入により飛躍し、考究する作畫態度であることを認めることが出来ると思ひます、身震ひする様な感動の熾烈な直接人間の内心に呼びかける様な作品を惹起する吾々は十九世紀以後の理論を抑賣りする様な奇矯なイズムには疲れてゐる、以上の如く本質を追ひつゝそのものを没却するに至つたものは、一應は純化されたものとして映ずれども藝術意欲の妥當なる發現に非ずして、誇大思想的特殊性を多分に包括してゐるが故に吾々はあらゆる美學の立場に照して慎重に再吟味しなければならぬ、現代我が國の洋畫壇を見るにかゝる誤謬を正當なる批判なくして直に取り入れ、眞理の把握が漸く等閑に附される様になつてしまつた、この弛緩せる趨勢の動きのなかにあつて少しの純化運動も起らないのは寧ろ不思議である。

あらゆる宗教、哲學、科學、藝術なるものが、新らしきものを嗜好し、それに依つて育てられることは人間の本能性で、常に發展して止まない文化の補足的變化の營みがしからしめるものであることは歴史的なものが明らかに語つてゐて、誰しも疑をさしはさむことが出来ない事實である、當の洋畫が日本に移入されたのもさうである、けれどもその洋畫が第一に時間的、空間的に非常に微々たるものである爲に、内面的刺戟の妥當性を抱合せず、現在に至るも何等の考察をまたずして、模倣に満足してゐるが故に、亦第二に藝術の一般的意義と現實社會との正當なる認識の不足に基因して、對象物即ち自然を遵奉し人間の内的衝動を殺して自然の形骸に捉はれ、或は自己の悟性を偏重して形式に最大の地位を譲つてゐる、先づ恚う云ふことに一應の分り過ぎたことを加えるならば、自然の再現は復現そのものゝ價值しかないことや形式は人間の傳統が醸し出したもので形式を形式で取り入れるならば遠く造型の精神から距離するものであることは傳統が雄辯に立證してゐる餘りに明らかである、畢境斯の如き誤謬は造型繪畫としての寫實力を失はしめ、自然に依つて表現され得ない生きたイデーの最も深い内的限定と性質とを直接に客觀化し、自然美を精神化し、亦是個別的現象に久遠の生命を與へるこの藝術に於ける最高の任務を標榜し努力しなければならないことを忘却してゐることで、認識を誤り、理想的即ち價值ある實在に相應せずして自己の非價值なる微候を明瞭に具有するもので、吾々は裝飾的ないしは骨董品の價值から離れて造型美術の第一要義を窺はなければならないと思ひます。即ち完全なる藝術はその究極的任務に於いては單

に想像の中のみでなく實際の上で絶對的理想を肉化し、吾々の現實を精神化しなければならない。然る可く對照物自然の動きかける究極的意志と加ふるに作家の美的感受性と内部衝動、平たく云ふと畫面上の造型要素、即ち色彩、光、線、面、量等等の内部職能とを相對的獨立性の下に直接的間接的關係を要求し、全部が一致し循環し融合して作品の價值を生ずるのであるからであります。以上の如き問題を實踐に移す場合は幾多の主義、主張、流派其の他の影響等に依り一朝にして隔合することは出来ず困難事ではあるけれども、未來が翹望する亦將來に力強く立たなければならぬ吾々青年は造型の深淵なる意義に向つて勵進しなければならぬと思ひます。此邦にも急迫した重大問題は現在社會に於ける美術狀勢の窮乏孤立したる狀態に於いては最早や少しの裕餘を持つ事が出来ないことを痛感するのであります。

とまれ幸吾々帝國美術學彼學生は因襲的傳統への束縛なく、時代の渴望の下に自由に向上することを入學と同時に約束されており、躊躇することなく自らの性態を充分に發揮して一切の藝術的欲求精神に接觸して益々自己の内容を擴大し豊富にして、難澁に打ち克ち眞理の建設を計らなければならない、しかのみならず藝術と科學との接觸交流點が映畫其の他寫眞器に至る迄多くなり、自然の藝術化、藝術と産業方面との一致説の唱導が盛んである今日、吾々は健全なる精神と高き理想とを持つて勞働たるこの機運を捉えるならば眞に時代の過渡期に生を持つたものゝ喜びを分ち得ることを信じて疑はないのであります。

終りに臨み、忌憚の無い意見を念頭に置いて居ましたが、廣範圍な問題を方幹の無い私が簡單且つ粗雑なる抽象的意見で痛切に披瀝することは出来ませんでした、要するに私の敢て辯駁せんとする處の核心を解して頂くならば最も幸ひとするものであります。

郷土玩具

圖・四 磯部 陽

△蒐集の動機

麥踏むやモンペにからむ風の蝶

山に包まれた北國の或る温泉の町は、それを歩いた時の事です。黄ばんだ空気の中に褐色の森がぼうつとうき出てみえます。山には未だ雪が残っていました。

これらの姿を更に生かしたのはモンベ姿の農夫達一家の麥踏みと只無邪氣に遊びまはつてゐる子供等の赤い頬でした。素朴なそして高雅な生活です。

これまでに経験した事のない感激にうたれて、凹凸の多い道を上りつめた時、と或る店先の埃の中に會つて子供の頃見た覚えのある古ぼけた真赤な玩具が投出されてあつたのです。みるからに素朴そのものの土から生れた可愛いおもちゃです。あだかも麥踏み一家を想はせる様な。

此の日の追憶にと買ひ求めて歸つたのが抑々蒐集の素因となつたことを記憶して居ります。

それから旅する毎に知らず／＼集めてしまつたのです。繪畫や彫刻では求められない或種の雅拙な味、郷土の匂ひのために全く玩具に愛着を感じるようになりました。

△種類と特質

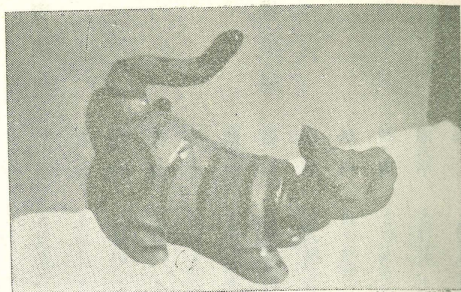
さて郷土玩具は左の三種類に大別する事が出来る様です。

- 一、張子製
- 二、土製
- 三、木製

この外竹製木の實製等もありますが大體この三種とみてよいでせう、中でも張子は最も多く又優秀なものも多い。

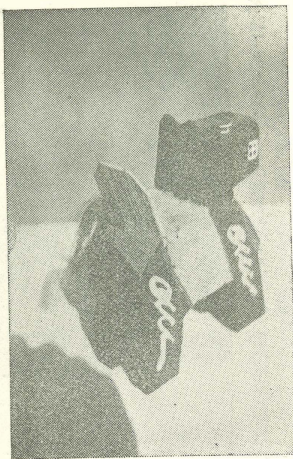
一、張子性のもの

張子は紙製であるだけに技巧に繊細な所がなく大膽な表現と共に素朴味も豊かであります。三春の首振虎なども三春駒(木製)と共に餘りにも有名です。なほ同地には俵牛、玉兎、獅子舞、起姫、天神等ありますが中でも虎は秀逸です。多年同一製作による洗練された美その描線のよさそして最も單純素朴化された之等の形こそ表現の極致であり傳統的に我等の賞讃する所以であります。この外會津若松には赤ベコ、馬、天狗面、などあり中でも



張子製玩具(三春首振虎)

二、木製のもの



木製玩具(飯坂木馬)

天神は首だけが煉物になつて磨き出したすばらしく端麗な顔には氣品があつて郷玩天神中屈指のものであります。次に久の濱天狗面は鼻の長さ二尺餘りものもあつて之れなどは童玩と云ふよりは寧ろ魔除けとして作られたものであります。又東京小傳馬町の犬張子、この張子こそは犬の象徴的想化に於ける日本の傑作であります。その他全國に互つて數ある中でも達磨は最も眼につきまゝ、白達磨、赤達磨、金達磨等々その數も非常に多く高知の女達磨等の中でも有名であります。

俗っぽい所もありますが東北の特色をよくつかんで面白いものに仙臺の髯達磨、關東のものでは埼玉の鴻の巣達磨越ヶ谷達磨或ひは群馬の豊岡達磨等一々擧ぐるに遑がありません。總じて張子は餘りに俗っぽい色を出しすぎて居ります。

木製のは割合に枯淡な色を用ひ素材そのもののもつ特質を生かして、模様等もあつさりと木地に畫いてゐるものが多い、東北各地にある「こけし」はその良い例であります。又木製の逸品三春駒等是有名すぎる程知られて居り、張子に劣らない雅趣を多分に持つております。

三、土製のもの

何と云つても土製には原始的な味を充分に味はえます。土製特有の色と量の厚味は他のものには見られない落着きと純朴さをもつて居ります。先づ博多土隅古型は今にみる様な所謂みやげ物風な通俗趣味とは全くその趣きを異にしたもので、あの色、線の



土製玩具(相良人形古型)

よさは今の人形からでは想像する事も出来ません
宮城の提人形は日本土玩の横綱格で最も知れ互つて居りますが高雅なそして浮世繪を聯想する様な抒情的な土玩であります。憂鬱の美、この魅力こそは東北の郷土のみが創造し得る感覚であり藝術であります。

甘美な線の流れは張子や木製では表はし得ぬところであり土の素材の特色を完全に生かしてゐる

名玩であります。この他伏見人形今戸人形(東京)相良人形(米澤)など何れもその古型に秀れたものがあります。

△分 布 (東北地方のもののみを採録)

青森縣

青森 金魚提灯、太鼓。

黒石 木馬。

八戸 八幡駒。えんぶり烏帽子。

大鰐 こけし、えちこ、獨樂。

温湯 こけし、えちこ。

弘前 土人形、金魚提灯、木馬、がらがら、獨樂、猫繪馬、面。

盛岡 板馬、萬燈、お福面、繪曆、キナ／＼坊、ちやぐ／＼馬。

花巻 土人形、首人形、キナ／＼坊、えちこ。

氣仙 張子玩具。土ひねり犬。

一ノ關 こけし、えちこ。

志戸平 こけし、えちこ、キナ／＼坊。

鉛 こけし、えちこ、キナ／＼坊、獨樂。

岩手縣

宮城縣

湯田 こけし、えちこ。

南部 千兩牛、人參馬。

仙臺 提人形(首人形、笛、土鈴、三番豆、天神、兎、猪、鳩)神輿、木下駒、こけし、蘇民將來、ぼ

んぼ、棺、姉様、張子(松川たるま、倭牛、おぼこ)

岩沼 竹駒木馬。

鮎嶽 篋嶽藥師蘇民將來。

松ヶ枝 三國神社蘇民將來。

唐桑 漁船、風車、彈き猿。

鳴子 こけし、えちこ、獨樂。

白石 こけし、えちこ。

鎌先 こけし、えちこ。

遠刈田 こけし。

秋保 こけし、獨樂。

青根 こけし、えちこ。

作並 こけし、獨樂。

彌治郎 こけし、えちこ。

小原 こけし、えちこ。

中山 土人形(達磨、天神)

八幡 土人形(子守、花魁、犬、狐)

木地山 こけし、えちこ、獨樂。

大館 こけし、えちこ。

大場 こけし、えちこ。

湯の澤 こけし。

瀧の原 こけし。

秋田縣

山形縣

秋田 厄拂星達磨。
小川 こけし。
大曲 蓼人形。
米澤 相良人形、こけし。

笠野 木彫人形(鷹、農夫、恵比壽大黒、餅搗)蘇民將來、こけし。
鶴岡 土人形(熊金、おぼこ、天神、ひな)姉様、手毬、風、えちご、木馬、獅子頭、犬車、板獅子、押繪、繪ローソク。

山形 煉物玩具(三番叟、兎、だるま、臥牛、獅子頭、首人形)張子玩具(達磨、駒)土製玩具(雷神様、天神、唐獅子、狐)姉様、家中雛、筆獨樂、竹蜻蛉、こけし。

酒田 獅子頭、馬犬、こけし、えちご、獨樂、土製玩具(熊金、天神犬)奴風、風車。

温海 こけし、えちご、獨樂。

上ノ山 こけし、えちご、獨樂。

白布高湯 こけし、えちご。

時折 こけし、えちご、獨樂。

銀山 こけし、えちご。

及位 こけし、えちご。

小野川 こけし、えちご。

向町 こけし、えちご、獨樂。

堀田高湯 こけし。

福島縣

福島 まさる、姉様だるま。

飯坂 木馬、獅子神樂、おけけん、こけし。

鮎湖 こけし。

二本松 獅子頭。

瀬上 起姫、だるま。

若松 煉物玩具(天神、雛、福助、獅子頭)張子(赤牛、馬、犬、兎、猪、だるま)女土地藏、姉様、風車、白虎刀、初音、奴風。

三春 木馬、子育木馬、張子玩具(俊牛、首振虎、玉兎、面)

岩角山 観音撫牛。

柳津 虚空藏臥牛。

東山 弓矢、羽子板。

中澤 こけし、えちご。

須賀川 羽子板。

熱鹽 こけし、えちご。

熱海 こけし。

玉山 こけし、えちご。

土湯 こけし。

久ノ濱 張子(天神、馬、兎、虎、獅子頭、天狗面)

△將 來

郷土玩具は人間生活を平直に描寫してゐるもので、そこに何らかの虚餘もありません。

古い玩具に残された郷土味と過去の生活状態とは吾々に懐古的な親しみと興味を與へます。然し只歴史あるが故に価値あるのではなくて、一ケの藝術品として認められます。そこには郷土の温みと民衆の力強い生活力が玩具を通して表はれたのであつて吾々はこれらの玩具から人間精神の純粹なる状態、過去の子供の心、地方の特異性を洞察する事が出来るのであります。で郷土味と歴史ある古い郷土玩具は確に尊いものでありますが只古きものへの憧れのみで骨董的存在であつてはいけないと思ひます。

温古知新、所謂古きものによつて新しきものを知り過去のものによつて我々は啓發されなければならないのであります。時代が進展し生活様式が動いてゆけばそれに伴つた郷土玩具が生れてくるのは當然で眞に新しき生活

から生れ出た玩具こそ現代のもつ美と力の創造であらねばならない。郷玩のもつ特有の興味は素朴さと純粹のロ―カルカラーに捨て難い味があるのでありますから各地に勃興しつつある農民美術などは生活を考慮しない唯單に土産物としての一様のものではありませんから之等のものには何れも一考も要しません。吾々はこれからの創生活具によつて新時代の理解を高め生活の向上を計らなければならぬ。

吾々は古い郷土玩具のよさをも一度その時代と併合して見直してみなければならぬ。

大川内焼について

西五 大久保實雄

私は陶器に就いては何もわかつてゐない。

いつだったか金原先生が陶器を造つてみないかと申されたが、やつてみたらきつと面白いらうと思ふが、今のところそんな氣もおこらないので、はづかしいことだが陶器の國で育つてゐながら、未だ一度の土いぢりさへしたことがない。したがつて私には批判的又は製作者の立場になつて大川内焼を話すといふことは出来ない。たゞ聞いて知つてゐる範圍において、大川内焼の歴史みた様なものを書いてみたいと思ふ。

大川内焼は有田焼と共に佐賀縣の特産物であつて、有田からは五里程西北に當る大川内山の山中に焼けるものである。

こゝは民家僅か百五十戸に過ぎないが、恰も屏風様の様な青螺山といふ岩山を背景にして、靜かに立ち昇つてゐる黒い煙は、大川内焼の面目を物語つてゐる様である。

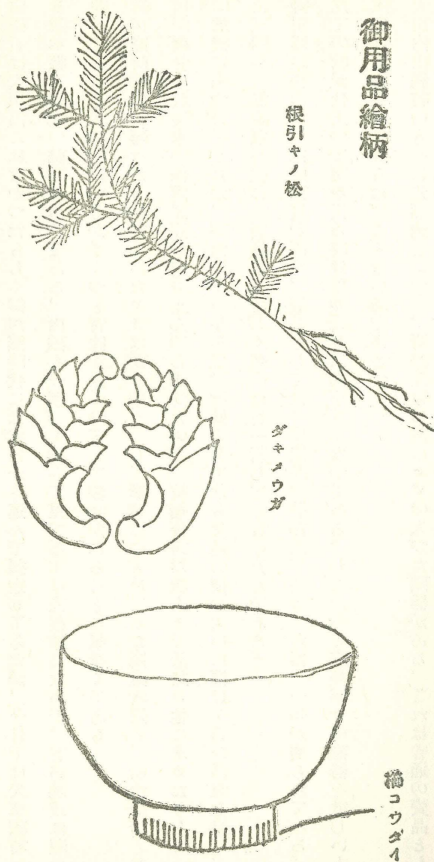
私が夏歸つた頃、丁度道路造りをやつてゐて、掘り出された陶器の破片が、赤い新道の一面に散らばつてゐた。何か古い珍らしい物でもと思つて探してみたが、これといつてたいしたものは見つからなかつた。一週間程前までは珍らしい古い物がチョイ／＼出ましたがね」と私に聲をかけたものがある、それは四十位の男で顔なじみの人だつた。掘り出し工事が終つて後にこの山に登つたのは實に惜しいことをしたと思つた。叔父の家に湯呑

みや皿に似たもの等數個あつてゐたが、今日大川内で焼けてゐる物のやうに固い質のものでなく、幾分軟か味があつて其の一つ／＼に面白い持ち味があつた。

古い物といつてもヒト焼位はたま／＼見るが、高麗焼といはれる黄色をした軟らかい質の焼物はあつたに見られない、これは移住して來た高麗人の手によつて今から凡そ三百年程前、つまり大川焼の創業當時に盛んに造られたものである。

大川内焼が有名になつたのはそれから五十年程後、佐賀藩主鍋島公の御用窯となつてからであつて、原料は白

御用品繪柄



磁を有田の泉山から青磁を大川内村六本柳からとつて、藩主の自用品又は將軍家への献上品等を入念に製作してゐた。

それ等御用品には一定の繪柄があつた、即ち根引きの松、だきめうが、柿こうだい等であつてこの繪柄を普通の賣品に模することは固く禁じられてゐた。最初御用窯は有田にあつたのだが、製法の妙技が廣く傳播することを恐れて交通不便なこの大川内山に移されたといふことである。今日でも村の陶業者達は青磁轆を持ち出して、他の土地で製造することを嚴禁してゐる。こんな例がある、大川内で陶業をやつてゐた某が一身上の都合でその